奥義を学んだのであった[22]」。

六、おわりに

わたしが、ディートリッヒ・ボンヘッファーとの出会いを経験したのは、ニューヨークのユニオン神学大学に留学した時であった。彼の親友であり、ボンヘッファーが風雲急を告げるドイツからアメリカに来るように尽力し、彼のために自分の大学での講座を提供しようとしたポール・レイマンのボンヘッファー・セミナーに出席したのが、そのきっかけであった。レイマンのボンヘッファーを思う熱い心に触れ、「この教室でかつてわたしはボンヘッファーと席を並べたことがある」と言って絶句したレイマンの姿に深い感動を覚えると共に、ボンヘッファーに強い関心を持つようになった。そして、先づ彼の獄中書簡から始まって、倫理学の研究に取組むようになった。すでに30有余年、折に触れてボンヘッファーの著作に親しみ、論文を書いて来た。

新約聖書神学の研究からスタートしたわたしが、キリスト教倫理学にその関心を移したことにもなるが、元来新約聖書における、いわゆる「信仰と行為」の問題に研究の焦点を合せていたので、わたしにとっては、転換というよりはごく自然にボンヘッファーの『倫理学』に心を引かれたのであり、関心が発展して行ったという思いがしている。多くのことを考えさせられ、教えられて、今、わたしは良き出会い、良き選択であったとの思いを深くしている。

ボンヘッファーの生きた時代は、暗く重くそして危機的な状況であった。才能豊かな神学的洞察の鋭さを持ったすぐれた神学者であり、キリスト者であったディートリッヒ・ボンヘッファーは、この時代の只中で、キリストを追い求め、キリスト信仰に生きる道を真摯に生きようとして、39才の若さで世を去った。しかし彼は今も尚、わたしたちに語りつづけているのである。

『倫理学』が、ボンヘッファーの中心的著作であり、彼のライフワークであることは明かである。それ以前の著作には、本書に見られるような大胆な独創性は見られないし、また本書にあるような成熟性と自覚された神学的方法における覇気は見られないのである。ボンヘッファーは世界に対するキリストの圧倒的な活動や教会におけるキリストの現在を世界自身の存在の深い理解をなすことなしには説明できなかったのである。この時代を生きるわれわれにとって、キリストとは誰なのか、が彼の生涯を貫いた真剣な問いであり、彼はこの問いを問いつつ、39年の短い限られた人生の馳場を走りぬいたのであった。

「教会はそこにおいてキリストの形が実際に形づくられる、人類の一部分以外のものではない。全くただイエス・キリストの形が問題なのであって、それと並ぶ何かほかの形が問題なのではない。教会はキリストにおいて人となり、裁かれ、新しい生命へと呼び出された人間である。したがって教会は、第一に、本質的にいわゆる人間の宗教的機能に関わるのではなく、すべてのものと関わりを持ちつつこの世界に生きている人間としての存在の全体と関わりをもつのである[23]」。

そのような、この世界に対する使命という視点からなされる教会に対する根本的な見方は、そこで停止するのではない。ボンヘッファーは、この「教会——世界」の教理の上に、彼の倫理の概念を構築しようとしたのであり、それはキリストの形になるということと深く係わり、キリストがまさにそこで自から責任を担いたもうこの世界に対する責任となったのである。

すでに何度もくり返して述べたように、ボンヘッファーの『倫理学』は、残された断行的な論文が彼の死後、ベートゲなどによって編集されたものであり、ボンヘッファーの中心的著作であるにも拘らず、彼の意図した『倫理学』との間には、大きなギャップが存在するかも知れないのである。多くの労苦をそのために傾けながら、ベートゲが謙虚に、『倫理学』を「完全な未完遺稿」と定義づけることは妥当なことであると認めざるを得ないであろう。

しかしそれにもかかわらず、『倫理学』は疑いも

22) J. Godsey : The Theology of Dietrich Bonhoeffer. P. 281.
23) Ethik, S. 89.